

# リシケン滞在記---スワミ・チダーナンダ

生誕100周年に寄せて

- 新田 裕子



「海の薄霧の中に、昇る太陽の温かさの中に、葉ずれの音の中に、降り始めの雨の匂いの中に、わたしを見つけなさい。

そしてあなたのハートの光の中に」  
～スワミ・チダーナンダ～

偉大な魂スワミ・チダーナンダジが、肉体の束縛から解放され、遍在する意識の中に溶け込んだのは、2008年8月

28日の夜のことでした。その亡骸は遺言通りに、マハーサーマディの数時間後には、長く総長を務めたディヴァイン・ライフ・ソサエティのすぐ近くの橋の下に沈められたのです、多くの人に見送られながら。

わたしが一人、北インドのリシケンを訪れたのは、その年の7月の初めのことでした。雨季で旅行者が少ないこの時期を選んだのは、たいした理由ではありません。前年の秋、ヨーガの教室の先生と仲間のグループで初めてリシケンを訪れた時、日本語の堪能な現地の添乗員さんが勧めてくれたからです。「気象異常で雨季でも雨が少なくなっているけれど、オフシーズンで航空料金は安いから」というのが、ガイドさんの話でした。以前、雨季(7月～9月)に来たことはないのだから比べようもなかったのですが、確かに毎日雨が降り続くわけではなく、暑さも日本の梅雨くらいで、過ごしやすいと言える言えました。

滞在先は、同じヨーガ教室で講師を務めていた方で、数年前にリシケンに移住された日本人女性Aさんの営むゲストハウスです。7月の初めから9月下旬までの2か月半、このゲストハウスからオートリキシャで、ほぼ毎日判で押したようにシバナダ・アシュラム(ディヴァイン・ライフ・ソサエティ)に通いました。

午前中アシュラムに特別なプログラムがない時は、ゲストハウスの部屋で本を読んで過ごすことが多かったのですが、お昼過ぎに始まるサンスクリットの教室に行くのが日課でした。教室、と言ってもアシュラムの正式なプログラムではなく、郵便局の仕事を担当する70歳近いスワミ・ハムサナンダジが、自分の仕事部屋で仕事の傍らに教えてくれる寺子屋のようなものです。時間は、午後1時30分くらいから4時まで。ガンガーが見える扉のない小さなオープン・ルームの座敷(カーペットを敷いた土間)に集まって来るのは、シバナダ・アシュラムの滞在者ばかりではなく、近くのアシュラムでヴェーダーンタ哲学を学ぶ外国人や、ハムサナンダジが懇意にしているインド人信者もいました。

最初にここを訪ねた時、日本で少しサンスクリットを学んだことがあると言うと、サンスクリット語だけのものと英語の読みと注釈がついた、2冊の「バガヴァッド・ギーター」とノートを買ってくるよう、ハムサナンダジに言われました。小学校で最初に書き取りをするように、一日1スローカー(1節)を、まずスワミジがノートに書いて下さって、その読み方を英語表記で書いたあとに、ノートの1ページにある行だけ同じスローカーをサンスクリットで繰り返し書くのです。1節が終わって時間があれば、何節書いて行っても自由でした。長く通っている人は、書いた後にスワミジの前でチャンティングをさせられていました。

こんな単純なことを、毎日続けられたのは、集まってくる人た

ちの多様さとスワミ・ハムサナンダジのお人柄に惹かれてだったので。前年、数十年ぶりに異国に行ったわたしは、今よりもっと英語が聞き取れず話すこともままありませんでした。毎日熱心に通ってくる中国人のC嬢は、母国語の他に英語と日本語が出来、意思の疎通が出来るために早く仲良くなりました。日本に来たことがあり、日本と食品の輸入の仕事をしているという彼女は、なまりのない自然な日本語を話し、顔立ちも日本人によく似ていて、まったく違和感を覚えずに接することが出来ました。大柄な彼女はわたしよりだいぶ年下なのに、まるで姉のように見え、事実よく面倒をみてくれました。『才色兼備』そのものの彼女と、ある時、サンスクリットを書きながら英会話を教わっていて、スワミジに激しく怒られたことがありました。めったに怒らないスワミジの剣幕に二人ともびつくり。「ここは英会話教室ではない」という言葉に、二人とも納得、深くお詫びをしたのでした。

サンスクリット教室のあとは、アシュラム内の音楽教室に行くこともありました。日本にいた時は、アシュラムでキールタンを習いたいと思っていたのですが、出発直前に腰痛になり、長く床に座っていることが困難な上に、ホルモニュームを弾くときは前傾姿勢になるので痛みひどくなり、あまり通うことが出来ませんでした。でも、リシケンに到着して間もなく、Aさんがこのスワミジに紹介して下さった手前、時々行って何曲か簡単なキールタンを教わりました。音楽教室は、午後の何時間か開いています。誰が行っても希望のキールタンやバジャンを教えてくれるのです。勿論、サンスクリット教室同様、料金は無料。アシュラムの書店でキールタンの本を買い、歌いたい曲を言うと、スワミジがまず、ホルモニュームを弾いてみせて歌ってくれ、その通りに弾いて歌ってみるというやり方です。キールタンは短いメロディの繰り返しですから、歌詞を書いた小さな本はありますが、楽譜というものはありません。耳と目と指で覚えて、弾きながら歌うのです。録音機も持って行きましたが、自分の楽譜を作ってノートにまとめました。日本ではピアノの先生をしていたAさんから、何曲か教えていただきました。リシケンに行くたび、音楽教室には通いましたが、いつも帰る間に言われることは一つ。「リズムが違う」。キールタンは(もしかしてインド音楽は?)日本にはない、7拍子です。わたしが歌うとJポップみたいになって、どうもキールタン独特のあのリズムと哀調が出ないのです。いまだ、それは克服できずにいます。

シバナダ・アシュラムには、夕方5時半くらいから40間ほど、キールタンを歌う集いのサット・サンガがあります。参加する人の中から歌う人を、担当のスワミ・ハムサナンダジが指名し、その人は自分の選んだ曲を歌い、後の人たちがついて歌います。主導の人が1フレーズ歌うと、同じところをもう一度皆が歌うのです。このサット・サンガはシバナダ・アシュラムを創ったグルディブ・スワミ・シバナダジが生前住まわれていた小さな家、グルディブ・クティールで毎日行われています。道路を挟んでアシュラムの反対側、ガンガーが見えるその家には沐浴用の小さなガートがあって、歌の後は全員でそこへ降りて『ガンガー・アラティ』をします。アラティは、銀色のお盆に乗せた樟脳に点火をして、ハムサナンダジとその日のゲストがお盆を回しながら、全員で『マザー・ガンガー』を歌うのです。歌い終わると、樟脳は跡形もなくなっていて、お盆の上にあった花を受け取った人がガンガーに投げ流します。歌い終わる頃は薄暮から暗闇になり、流れていく花を見ていて、日本の精霊流しを思い出し、アラティに出るたびに人の魂を送っているような厳粛な気持ちになりました。

夕方のサット・サンガとは別に、夜のサット・サンガはアシュラムの夕飯の後にあり、夜9時過ぎまであります。内容は、その日のスピーカーが話すレクチャーが主でした。土曜の夜だけ、『ハヌマーン・チャリサ』という、ラーマの召使いであるハヌマーンの

歌の会で、詳しく理解していませんが、ラーマクリシュナ・ミッションでの『ラーマナーム』のようなものかと思っています。アシュラムは、Aさんのゲストハウスからはオートリキシャで5分ほどなのですが、夜8時を過ぎると、このリキシャを捕まえることがとても難しくなります。ですから、夜のサット・サンガに出る時は、特別なことがある時だけで、その時はAさんのゲストハウスのボーイさんに迎えに来て貰い、歩いて帰ることになるのです。徒歩ですと、20分はかかり、また、夜間は稀ですが、虎が出ることもあるそうです。実際、2回目のリシケシ滞在中、虎に襲われて亡くなった女性がいると新聞に載ったのです。相手が虎だと護衛がいても何もしないと、心底ぞっとしました。

さて、滞在も2か月近くなる頃の朝、アシュラムの当時の総長(プレジデント)である、スワミ・チダーナンダジが脳出血で倒れられた、というニュースをAさんから聞きました。チダーナンダジは、この1年前に日本の国営放送が創った、インドのヨーガの聖地を有名女優が取材する番組の最後に、偶然な形ではありますが出演されたのです。90歳を超えられ、数年前からは、アシュラムから車で1時間ほどの閑静な街で隠遁生活を送られていました。テレビの向こうですが、写真以外の、実際に話をされる姿が画面に映った瞬間に涙が溢れました。痩せてベッドに横たわりながらも、ヨーガについて説くその姿は内から光を放射しているように見えました。それは、自分の欲望については一切考えず、他者のためだけに生きる人が持つ輝きなのだと今は思えるのです。わたしのハタ・ヨーガの先生は、スワミ・チダーナンダジを『ヨーガの師』と仰ぎ、教室には今も、グルディブ・スワミ・シバナナダジとスワミ・チダーナンダジのお写真が飾られています。この教室で、何人かのアシュラムのスワミジたちにお会いすることが出来ましたが、チダーナンダジにはまだお目にかかったことがありませんでした。日本には何度かいらしていましたが、わたしがヨーガを始めた時期とのタイミングによるものでしょうか、ご縁がないとお会い出来ないのだな、と感じていました。このリシケシ滞在中に、スワミジがアシュラムを訪問されることはないだろうかと時々思っていたのです。

そのスワミジの回復を祈って、「マハー・ムリトゥーンジャヤ・マントラ(死に打ち勝つマントラ)を72時間途切れることなく唱えるという行が、アシュラムで始まりました。場所は、朝の瞑想や夜のサット・サンガが行われるサマディ・シュラインです。サンスクリットの勉強の後にシュラインへ行くと、数名のスワミジたちや信者さんたちが、シュラインの隅に一人になってマントラを唱えていました。わたしも、交代の時にその輪に加わりました。いつも誰かがこのマントラを唱え、途切れることがなくなっていました。その行が始まって2日目(だったと記憶しています)、夜のサット・サンガでも、マントラを参加者全員で唱えることになったと聞き、Aさんと出掛けました。シュラインにいる人々がマントラを唱える際中、サット・サンガが始まって1時間ほど経った午後8時30分頃、備え付けの電話のベルが鳴りました。わたしは内心ドキッとしました。マントラの声が止むと、ほどなく、サット・サンガの司会をしていたスワミジからチダーナンダジの訃報が伝えられました。大きな落胆の轟きを聞いたように思いました。信じたくない・・・冷え冷えとした気持ちでいると、サット・サンガはお開きになり、仕方なくAさんとゲストハウスへ帰りました。

その明け方、アシュラムからの知らせでチダーナンダジを見送るためにガンガーへ出掛けて行くと、Aさんから朝起きて聞きました。一緒に行きたかったと思ったのですが、午前3時頃のことだったし、大変な混雑になると思いを使ってくれたそうなのです。チダーナンダジのご遺体は、隠遁先の別荘から車でアシュラムに運ばれた後、輿のような物に乗せられ、お付きの数名のお坊様がその輿を持って、長くお仕えになったシバナナダ・アシュラムの中を回られたそうです。そして、周囲で暮らす人たちの日常生活に差し障りの出ないよう、速やかにガンガーに沈めるようにとの遺言通りに、シバナナダ・アシュラム近くの橋の下に重りを付けて沈められたそうです。インドでは、遺体は日本同

様火葬にしますが、スワミジたちサンニヤシンは出家の儀式の時がお葬式と同じということで、燃やさずにガンガーに流すのです。この日一日はリシケシ中のお店はお休み、喪に服したのです。

翌日、時々行ってお昼ご飯を食べる外国人もよく行くカフェに行きますと、奥からオーナーが出て来て、「チダーナンダジのような霊性の高い魂がリシケシに現れることはもうないでしょう」と言い、自分が子供だった頃のチダーナンダジとの思い出を話してくれました。チダーナンダジはとても腕が長かった、という言葉が印象に残っています。仏像はみなそうですが、長い腕は沢山の人々を救済するその象徴だと書物で読んだことがあります。チダーナンダジも確かにその通りだったのでしょう。

そしてその日の午後は、スワミジの大きな肖像写真を荷台に乗せた車が、アシュラムからリシケシの街中をゆっくりと走る行進が何時間かにわたって行われました。車がアシュラムの近くのチダーナンダジのお住まいである『グル・ニワス』の前に戻って来た時、アシュラムのスワミジたちやブラマチャリたちが一団になってキールタンを歌い出迎えました。その熱狂は、悲しみというよりお祝いのように感じられました。その日から約2週間、スワミ・チダーナンダジのマハーサマーディを祝う儀式が続きました。生前、時間と空間を超えるサマーディを体験されたスワミジにとって、肉体の死は悲しいことではなく、喜ぶべきことなのです。肉体という制約を解かれ、『サット・チット・アーナンダ』、遍在する純粋な至福の意識の中に溶け込んだのですから。儀式には沢山の人が集まり、アシュラムは毎日賑わって平素の静けさが嘘のようでした。このお祝いのために用意された引き出物を貰えるように、ハムサナナダジが取り計らってください、チダーナンダジの写真入りのグッズ---例えば、小さい物はキホルダーから大きい物は掛け時計まで、手提げ袋に沢山の物が詰め込まれていました---をいただくことが出来、大切な日本へのお土産となったのです。

この祝いの式の間何度かグル・ニワスを訪れましたが、最も印象に残ったのは、ガラスケースに納められたグルディブ・スワミ・シバナナダジとスワミ・チダーナンダジの木製のサンダルです。二つは一つのケースに並べて納められているのですが、お二人の体格と関係を表すかのように、シバナナダジの物は大きく、チダーナンダジの物はそれよりやや小さいのです。そして、式の熱狂ぶちから、スワミジがどれほど多くの人たちから慕われ愛され尊敬されてきたかが実感されました。チダーナンダジを必要とする人たちのために生き続けた人・・・先に書いた日本のテレビ番組で、訪ねて来た女優に病床から聞く「わたしに何か出来ますか?」。まさに、グルであるスワミ・シバナナダと絶対の存在である神の道具として、人々に奉仕続けた生涯だったので

シバナナダ・アシュラムとリシケシの街が静けさを取り戻した頃、日本に帰る日が迫っていました。サンスクリット教室をあとにする前日、ハムサナナダジにご挨拶をしました。時々教室にやって来るスワミジの妹のスワヤンブラバが、「もうすぐナヴァラトリだからそれが終わるまでいればいいのに」と言い、そう聞くと後ろ髪を引かれる思いがしました。しかし、航空機の変更がここでは大変そうなので、やはり予定通りに帰ることにしたのです。知り合いになった人々には、「またすぐ来るから」と言い、さよならをしました。デリーまで行くタクシーに途中まで同乗して見送ってくれたAさんが、車を降りてからも何かしきりに言っていました。ハリドワールを通ると、来たときは雨にけむっていた大きなシヴァ神の像がはっきりと見えたのを、今思い出しています。





# インド舞踊を習い始めました！

— 三橋 裕子

昨年の7月からインド舞踊のオリッシーを習い始めました。

私の大好きなインド人の友達が日本画を勉強されていて、展覧会に作品を出展されるほどの腕前です。

彼女の色使いや絵の雰囲気がとても素敵です。

彼女が日本画なら、私もインドに関係している事で何かを始めてみたいと思うようになりました。

偶然、目にしたインド大使館での案内で、家から一駅離れたところのカルチャーセンターで、生徒募集をしていました。

あまりにも身近なところで開催されていることに驚き、問い合わせをして見学に行き、そして、そのまま入会して今にいたります。

私が問い合わせをしたのは、【安延佳珠子インド舞踊スタジオスタジオオリッシー】のカルチャーセンタークラスです。

学ぶ機会を得て、インドの文化にふれることができ、レッスンの日が待ち遠しいです。

オリッシーはリズムの取り方が難しく、ステップやムドラ(手の形)など、複雑で思うように体が動きません。ですが、動けなくても、とにかく楽しくて、練習用のサリーとチョリを着るとワクワクします。

初めてオリッシーを見たとき、今まで目にしたことがない動きと、表情豊かな踊り子さんたちに感動しました。踊っていたのは日本人の女性ですが、化粧のアイラインがエキゾチックで、平たい顔つきの日本人が、目鼻立ちのはっきりしたインドの女性に変身したみたいで、非日常の空間に突入します。

私も踊ってみたいと惹かれましたが、当時は習える場所を探そうとはせず、仕事もあるのでオリッシーは見られるだけで充分だと思っていました。

生命謳歌のオリッシーにふれて、意味のある動き、知る楽しみに感動しています。

今年は代々木公園でのイベントの一つである、ナマステ・インディアに出させていただけの機会を得ました。早稲田スタジオの先輩たち、大使館クラスのかたちと、合間で「サンバルプリ」を踊ります。

少人数のカルチャーで学ぶのとは全く違う雰囲気、適度な緊張感と、みんなで合わせて踊る楽しさ、素敵な舞台

にしようとして一致団結する一体感に、近年感じたことがない経験をさせて

いただいています。本番

で踊り終えた後の達成

感が得られるように、

指摘されたことや変更

になったことなどをメモ

にとり、家で復讐して努力

しています。しかし、自

分の拙いメモがあ



っているのか？はなはだ疑問です。そんな時は先輩がたや、カルチャーの仲間、今回参加させていただけることで、あらたに連絡を取り合えるようになった大使館クラスの仲間がいて、疑問に思うことや、些細なことでも、皆さん丁寧に教えてくださいます。

先生も生徒も、皆さんとっても素敵です。そのような方たちと場所と時間を共有できるのが、とても心地よくて、頑張っについてゆきたい、踊れるようになりたいと思います。

私たちがインドの文化を日本で体験できる機会を作ってくれた、Studio Odissiの安延先生に感謝します。

写真は先生を中心に上級の先輩方の【ドルガー群舞】です。

今年は台湾公演をされました。

大使館で見かけた広告に、【初めてのインド舞踊…始めてみませんか？】とありました。

「心静かに自己をみつめ、人生を豊かにする一つにして下さい。」とあって、大使館でバガヴァット・ギターと、ウパニシャットを学ばせていただいているので、そのコメントにも惹かれました。舞踊の中の「生命謳歌」という内容が、哲学の知恵も入っているように感じられ、そう思うとより深く受け止められます。

レッスンの前には、心を込めて挨拶をしてから始まります。

終わるときも一緒です。

スタジオにはジャガンナート神が祭ってあります。

インドの人気のある神様で、可愛らしい不思議な形をしています。

調べてみたら、ジャガンナート神はクリシュナ神の化身とも言われていること、

ジャガンナート寺院の本尊として祭られていて、ジャガンナート神は三体セットだということ。黒い顔がジャガンナート(クリシュナと同一視)であり、白い顔が兄のパララーマ(クリシュナとともにヴィシュヌの化身のひとつ)、黄色い顔が妹のスパドラ(アルジュナの妻)だと

神様で兄弟なんだと微笑ましく身近な存在に感じつつ、しかしジャガンナート神は全宇宙の神として信仰を集めていることを知って、インドに不思議な魅力を感じました。

昨年は秋にインドを訪れ、ヴリンダーヴァンやヤムナー川に行き、クリシュナ神ゆかりの場所をまわりました。いつになるか…オリッッサ州のプリーという聖地に行ってみたくないと、夢が膨らみます。

皆様もぜひ、初めてのインド舞踊、始めてみませんか？ ■



# ある見習い修道女の神さまへの問いかけ

－ 佐藤 洋子

主よ、私は己が完成の為にだけ生まれてきたのでしょうか。

それだけだって、どんなに大変なことか・・・どんなに難しいことか！

何度行きつ戻りつしたことか。

現に今だって、自分がどの地点に居るのか、進歩しているのか、退歩しているのかさえ分からないのに。

有史以来、多くの聖賢方がどのように努力し、最高の境地に到ったか見てきただろうに。

わが師が、どのように生き悟ったか、充分見てきただろうに。

自己完成、真理を悟ることがどんなことか、どんな風に生きなければならぬか、骨身に浸みている筈なのに。

自分の生まれて来た、唯一の意味さえ達成できないのに、そのために何億生涯をかけることなのに。

今、その何億分の0.00001歩？すら、踏み出したばかりだというのに・・・

お前の80年にも満たない生など、その0.00001歩踏み出すための準備期間にすらなれないのに。

今現在、停滞を感じていることを理由に、自分の生まれた意味を、さも軽いことのように、他にもっと重大なことでもあるかのように。

自分は、自分が生まれた意味を全うするより、もっと重大なことをするために、あなたも相応しい者のように、傲慢にも主に問うとは、何というばかなことだろう！

今だって、本当はふさわしくもないのに、主のお慈悲で生まれ、こうして平穩に生かされているというのに。

自分の重大な生も全うできずに、生まれてきた意味を、他にもあるだろうと思って問うとは。

生まれてきた、他の理由を知りたいと望むのは、自分の人生の中に、もっとすぐれた良い意味があるに違いないと思ったからだろう。まるで、自分には非常に優れた能力があると思いついでいるようだ。

一体お前の頭の中にある、生まれてきた意味を全うすることより偉大なこととは何なのか、逆に質問したい。

答えましょう。

それは、自分の悟りの為にだけ努力して生き、仮に全うしたとて、それが何でしょう。

確かに困難なこと、偉大なこと、あなたの聖賢の努力がどんなものかわかります。多くの最高を目指す人びとが、挫折したこともわかります。

自分が、どれほど小さなもの、弱い者であるかも、能力の欠如も知っています。

それでも、それでもですよ、自分だけの完成だけを目指すことが、エゴのように思えるからなのです。

もっと主よ、あなたのために働くことこそ、大切なのではないか、あなたのために、何かをすることも、生の目的の一つに入ると、私は生まれてきたのではないのでしょうか。

片方で自己完成の努力をしつつ、それが停滞し上手くゆかないときは、もう一つの目的である、あなたのお仕事に集中しつつ、自分の退歩や落下を防ぎながら努力する、するとその努力の中で、主の仕事そのものの中から、インスピレーションを感じて、少なくとも、元いた地点からまた出発できるのではないかと、そう思って問うたことは確かです。

これは、悪いことなのでしょうか主よ。

本能的に自分の退歩を防ぎたい、落下を防止したいセンサーが働いただけなのだと思います。それも傲慢なことなのでしょうか、主よ。……

時が過ぎ。

今、わたしも少しかわりました。

生も死も、逆境も平安も、幸も不幸も、一切は私の意志ではなく、主よあなたのご意思でなされていることを日々感じております。

どのような努力もあなたの恩寵次第、自分の努力など何物でもないこと。

私の努力のようなものは、ただあなたの無限の慈悲深い顔をこちらに向けさせたい、風のようなものです。

主よ、大宇宙も小宇宙も言葉で表せるすべてと、表せないものは、あなたの中にあるのです。おお、主よ、私も今はなにも望みません。十分に満ち足りておりますから。

願わくば、あなたへの愛で狂気したいのです。その愛だけがまだ与えていただけません。

あなたへの強烈な愛を、どうぞお授けください。でも、あなたへの愛に狂気して、消えてしまうのではなく、あなたへの愛の為ゆえに、どうぞ、この地上にお戻りくださることもお願いします。あなたの道具であるこの物(心身)が、あなたのお仕事のただ中で朽ち果てますように、のために。 ■



# ボタニカルアートを始めて

－ 加藤 溪子

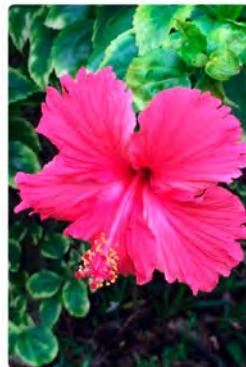
私は夫の転勤でシンガポールに住んで2年になります。ここでボタニカルアートに出会いました。ボタニカルアートは、古代エジプトや中国、ギリシャ・ローマ時代に、薬草を正確に、記録するために描かれた植物画です。特に大航海時代に、ヨーロッパ各国の植物学者と画家と一緒に新種の植物を記録し、本国に送っていたそうです。同寸大に、また背景は白地のままのシンプルなアートです。

ボタニカルアート/植物画教室に通い始めて三か月になります。今までにミニトマト、ドラゴンフルーツ、プロテア・ロビンを描きました。今は赤いパプリカを描いています。私はデッサンが苦手なのですが、色付けは楽しく、先生が見本で見せてくださる色の調合と筆使いで本物の色に近づいていく過程は魔法のようです。



植物画を描く楽しさはもちろんですが、絵を始めてから思いがけず別の楽しみも出きました。一つめは南国フルーツとの出会いです。二回目に描いたドラゴンフルーツは見た目は赤い恐竜の卵のようですが、果肉には種のプチプチした食感があり柔らかい甘さです。むいたオレンジ、キウイと一緒にハチミツとレモン汁にマリネすると、彩りもよく美味しくなります。スターフルーツやパッションフルーツ、マンゴスチン、そしてライチのように甘いロンガンやラ

ンブータンなどの、今まで日本ではお目にかかることのなかった果物を手に取るようになりました。二つめは季節を感じられるようになったこと。春の桜、夏の朝顔、秋の紅葉、冬の梅と四季のはっきりしている日本とは異なり、シンガポールに咲く花は一年中同じと勝手に思っていました。けれども気をつけて見てみると、花の色や大きさで旬があることがわかってきました。先日も風に大きく揺れるヤシの樹に花が咲いているのを見つけました。季節が動くエネルギーには何か元気が出ます。そして最後は花の作りの美しさの発見です。ハイビスカスの雌しべは、先に丸いボールのついたアンテナのようです。またドナ・オーロラの黄色い花は綺麗な星型です。色の調和も含めてその美しさに驚かされます。



ところでシンガポールには、1850年に開園し2015年に世界遺産に登録されたボタニックガーデン、そして2012年オープンガーデン・バイ・ザ・ベイがあります。人気の観光名所です。

63.7ヘクタールもの広さのボタニックガーデンには、シンガポールの国花の蘭を集めナショナル・オーキッド・ガーデン、世界の生姜を集めたジンジャー・ガーデン、東南アジアの山岳地帯の植物が見られるクール・ハウス、東南アジアで伝統的に薬に使用される植物を集めたヒーリング・ガーデンなどがあります。私の好きなジンジャー・ガーデンに咲く花はとても華やかです。そしてガーデン・バイ・ザ・ベイの二つの大きな温室、フラワードームは地中海沿岸と亜熱帯の半砂漠地帯の植物を、クラウドフォレストは低温で湿度の高い山岳地帯の植物を見ることが出来ます。ここでも異国の植物にたくさん出会えます。そしてちょっとホッとしたような気持ちになります。

実は私は新しいことを始めることには勇気が要りました。でも思いきってボタニカルアートを始めてみて、久しぶりに



自分の世界が広がりました。また何かに出会ったり、気づけたりする事があるかも.....。それが今はとても楽しみです。■



**東**京目黒区に生まれ育った私が、初めてインドの文化に触れたのは、小学校3年生の時でした。洋食レストランのオーナー兼シェフだった父が旧友に、インドから来たシェフが働き口を探していると相談され、洋食レストランからインド料理店に転向することになりました。

80年代後半、世はまさにバブル時代で、タンドリーチキンが2ピース3,500円、カレーも1人前2,000円以上で提供していましたが、お店は繁盛していました。当時は、イタリアン料理(通称イタメシ)やティラミス、エスニック料理がブームで、当時の新し物好きでミーハーな日本人に、インド料理もそれらと同様に受け入れられたのかもしれない。

6年近く営業していたレストランを閉めたのは、インド人シェフが頻繁に給料の値上げ交渉をしてきたことが原因だったように記憶しています。おてんばだった娘の私たちに対してもほとんど怒ることがないくらい穏和な父が、彼らに激怒する様子を見てしまったことがあったからです。結局、交渉決裂となり、インド人シェフたちはうちの店を辞めてしまい、うちの店はインド料理店から会員制のバーに変わってしまいました。

私としては、いつも優しく遊んでくれたインドのおじさんたちがいなくなり、大変残念でした。彼らは休憩時間に遊んでくれたり、キッチンに居座っていた私にチャイやナンンの作り方を教えてくれたり、運動会などの行事の際にはタンドリーチキンやナンなどをお弁当に持たせてくれたり、大変貴重な経験をさせてくれました。(小学校の運動会でインド料理をお弁当に持ってくる子なんて私くらいでしたから)インド人と結婚した今、あの時もっと真剣にインド料理を彼らから学んでおくべきだったな、とちょっとだけ後悔しています。

インド人の夫と結婚して9年目。趣味や性格はまったく異なる私たちですが、唯一共通する楽しみが食で、休みの日にはビューフェやお気に入りのレストランで食事します。そこでも、話題は料理や食材についてで、食事の帰りにスーパーに立ち寄りという、本当にエンゲル係数の高いカップルだなとつくづく思います。

私見ですが、インド人は世界の中でも特に食にうるさい人種



だと思っています。それは、インドの女性は非常に料理が上手で、どんなに忙しくて疲れていても、必ず家族のために温かいロティーを作るからです。夫の母は、そんなインド女性の中でも別格だと思っています。お寺(gurudwara)で週末、何百もの人たちに振舞われる特別な食事(Langer)を何度も手掛けているからです。私も料理人の父の娘として、お姑さんを見習って夫の胃袋を満たせるように料理を頑張っていきたいと思っています。

私の料理の大先生であるお姑さんの名言を紹介します。まず、「嗅覚を使え!」。料理は、時間を計ったり、目で見なくてもできる。例えば、ダルを圧力鍋で煮ている時、匂いで鍋の中の様子分かるようになるそうです。いやはや、達人です。我が家では、週2回ペースでロティーを焼いています。9年経ってよ



うやく失敗なく柔らかいロティーを焼けるようになりました。アタに水を入れてこねてと、とてもシンプルですが、時間が経っても柔らかい生地には、色々とコツがあり、これまで何千回と作りましたが、納得のいくロティーになってきたのは最近です。

私とインドとのつながりは、もう一つあります。フルマラソンをしていた頃、長距離を走り、凝り固まった筋肉をほぐすために始めたのがヨガです。すでにヨギーだった姉に勧められ、アシュタンガ(ashtanga)を始めました。アシュタンガとはサンスクリット語で、8本の枝(Yama: 禁戒、Niyama: 勸戒 Asana: 坐法、pranayama: 呼吸、Pratyahara: 感覚の制御、Dharana: 集中、Dhyana: 瞑想、Samadi: 三昧)という意味を持ちます。太陽礼拝から始まり、坐位のアサナ(ポーズ)から逆転、フィニッシングまでアサナが決まっいて、呼吸と動きを連動させる、ダイナミックかつエネルギッシュなヨガです。身体のすべての筋肉を使い、継続的に深く呼吸をすることで、全身に酸素が行き渡り、練習後には身体から痛みや不快感が消え、達成感に満ち溢れ、安定した気持ちになります・・・と文字にすると簡単そうですが、ヨガの中でもっともハードな流派のため、アサナと呼吸がリンクするまではかなり練習が必要です。でも、ストレスの多い現代社会には、ヨガはすごく適していると思います。毎日、忙しく働き、深呼吸することも忘れてしまい、身体が酸欠状態の人たちには、マッサージよりも根本的に改善できるヨガをお勧めします。

私とインドとのつながりは、ここに紹介したことだけではなく、もっと深い部分にあるように思います。過去に争いなく、お互いを尊重し、良い関係を築いてきた日本とインドが、今後も深い絆で結ばれてゆくことを強く祈ります。■



# 日本の夏をカディですごしませんか？

－ 石澤 砂月(Ishizawa Satsuki)

『カディ』に対する日本人の私の最初の認識は、『手紬手織りの綿布』という程度のものであったが、それだけでも染織をする私にはあこがれの存在だった。糸から布になるまですべてを自分自身で行うなんて、私の目指す最終形である。この『カディ』、実際に使ってみると、その心地良さは特筆に値する。どれほど素敵な素材かと私の個人的な思い入れを聞いていただきたい。

## カディの良さ ～たくさんの空気を含む布～

手紬の糸は多くの空気を含む。手織りの布も多くの空気を含む。

現在一般的に流通している布は、エアージェットやウォータージェットと言われる機械で織られている。

(その機構も興味深いものがあるが、ご興味のある方は東京農工大学科学博物館(小金井市)で毎週火曜日には動いているところをみるできるので、足を運んでみてはいかがか。ちなみに無料である。)

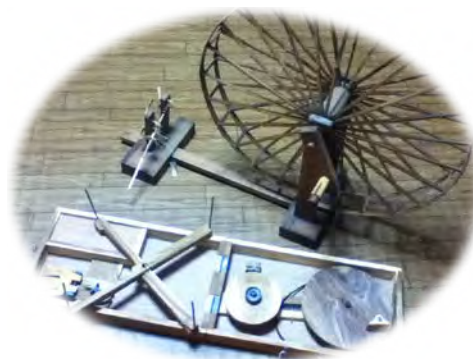
一般に織りスピードが速いと、打ち込みが強くなり、布目の詰まった丈夫な布が出来る。しかし手織りでは、布目を詰めて打ち込むには限界がある。

しかし、ゆっくり作られた糸や布はたくさんの空気を含んでいる。だからか湿気(汗)を吸って、空気中に吐き出し、まるで深呼吸をするかのようにゆったり呼吸をしているように感じる。

また、手紬の糸は、デコボコとしている。これが良いのだ。日本の縮みと同様に肌にあたる面積が少なく、サラッとして気持ちが良い。綿は短い繊維によりをかけて1本の糸にしていく。その過程で紡ぐ人の個性(または技量とも言えるのだが)が表れるともいえるのではないか。より繊細な糸を作る人もいれば、無骨で温かみのある糸を作る人もいる。どちらが良いというものではなく、好みの問題だと思っている。醤油顔が好きか、バター顔が好きかみたいなものだが、どちらもゆったりと深呼吸をしている事は変わらない。



## 『カディ』と言えば・・・



子供のころに歴史の教科書に出てきたガンジーは、白い布を纏っていた。それがどんな意味を持つのか本当のところは私には理解出来ていないと思うが、彼は「世界の人々が自分に必要な分だけを消費するなら、世界から飢餓はなくなる」という趣旨の事を言ったという話を小耳にはさんだ。(小耳にはさんだので定かではない)この言葉には心を動かされる響きがある。「自分に必要なものは自分で作る」この精神を『カディ』は目に見える形で私たちに示してくれていると感じる。

私の部屋には、日本の糸車とともにブックチャルカがある。どちらもまだまだ使いこなせてはいない。このブックチャルカはガンジーの話にいたく感動して「ブックチャルカで糸を作ってみたい」とお手頃品を探している私に、インド旅行の折に購入していたお土産を友人が譲ってくれたものだ。全く形が違うがこのブックチャルカは、携帯用として良く考えられている。ちなみにガンジー考案と聞く。もっと小さなブックチャルカを手に入れて、小脇に抱えて旅しながら糸を作るなんていう、贅沢な時間を五日過ごしてみたい。

## 私がカディをまとう意味

私の糸作りはまだ始まったばかりで、布を織れるほどの量を作る域には達していない。それでもいつの日か、自分で作った糸で織った布を纏う日を夢見ている。

私にとって『カディ』を纏うことは、『足るを知る』ことである。私にとって大切と思えるものだけを欲することである。消費社会の中で、消費する行為に疲れている私にとって安らぎである。そして何より、カディを纏っているのは心地良い。時間にせかされている今の時代の中で、ゆっくり作られたものはそれだけで使う人に安らぎを与えてくれるように思う。

みなさまも、日本の夏に『カディ』を纏って過ごしてみませんか？ ■



# 最近のわっこひろば宙

－ 山田 さくら

今年もわっこひろば宙恒例の開園記念イベントで、「千年の森」へ行きました。今年も大勢の親子が参加。ただ今年、あいにく朝からの雨が上がりず小雨の中での開催になってしまい、残念ながら森の中への親子散歩は出来ませんでした・・・

それでも子ども達は雨なんか何のその、小雨の中を合羽を着てダム作りに励んだりツリーハウスで遊んだり虫さがしをしたり・・・遊びを満喫していました。野外料理のカレーも評判上々。完食でした！



わっこひろば宙は、今年で6年目。こころ育てを芯にすえた自然体保育が持ち味の保育園です。6年やってみてつくづく思うのですが、子育てにしる保育にしる、その時代その環境に生きている子ども達を通してその子その子に合った育て方を見つけていくことが重要だということです。書物になってマニュアル化した教育論や保育論を勉強することもある意味大切かもしれませんが、個々の子ども達が発信しているメッセージに沿った子育てがやはり最適な気がします。そこにこそ親や大人にとっての子ども育ての責任があるのですから。



ただ現在の日本の環境は孤立化していて、子ども達が戸外で生き生きと遊んだり近所の人達と関わりながら生活したりする・・・ということから、かけ離れた環境になってきています。家の近所や公園・神社などで子ども達だけで遊んでいる姿を見かけることは、この信州の片田舎でも見かけることがほとんどありません。そのことを踏まえてのわっこひろば宙でもあり、いろいろなイベントを企画しながら、様々な親子のコミュニケーションが取れる場になればと思っています。

タゴールさんも言っています「それぞれの環境に合った教育をすれば良い」と。タゴールさんが、シャンティニケタンに森の学校を創ったのは、イギリス領下のイギリス流教育ではなく、インドの環境に適した教育をしたかったからだと思うのです。

画一化され行き詰ってしまっているこの国の子育てや教育を見るにつけ、この国の将来が気にかかって仕方ありません。今思えば、動物はもちろん様々な人達が行き交っていたインドという国は、学校だけでは学べない学びが外にはたくさんありました。次世代を担う子ども達にとって、それらは学校教育と同じくらい大切なことのはずです。

この国の次世代の子ども達のこれからは・・・気づいた大人がやれるだけのことをやっていくしか方法はないのかもしれない。■



シャンティニケタンで





# 初のインド旅行

－ 佐伯 田鶴(さえき たづ)

## ■ 初めに

1年前、ひょんなことからこのAnjaliに記事を書かせていただいた時、「インドには行ったこともなく」と書いた私ではあるが[1]、その後、2015年11月に、仕事の関係で初めてインドに行くことになった。マハーラーシュトラ州のPune(プネー)へのたった4泊の旅であったが、その時のことを少々記そうと思う。

## ■ インド到着

出発前の1週間は、現地での仕事の準備に加え、天気予報のwebサイトでPuneの天気を毎日チェックし、着るものを何にしようかあれこれ考え、胃腸薬をいつもより多めにスーツケースに詰め、インド人の同僚に「Puneの治安はどうか」と聞き、ネットでインドの習慣を勉強し、これまたネットでデリー空港での乗り換えルートを予習し、インド初心者である私はかなりドタバタと時を過ごした(今時はインターネットに様々な情報が載っているのがありがたい)。そして、11月の下旬に成田空港を出発し、デリー空港で国内線に乗り換え、Pune空港に無事到着し、初めてのインドの地を踏んだ。インドのこの地方では、11月は冬の始まりで比較的過ごしやすいそうである。冬とはいえ、さすがは熱帯の街(北緯18.53度)、気温はかなり高く、街は青々とした緑に覆われていた。木の種類も日本の本州とは異なり、空中に根を伸ばしている木などは私には見慣れないものであった。

## ■ インド熱帯気象研究所(IITM)

今回の目的は仕事関係の国際会議出席である。「AsiaFlux Workshop 2015」という会議に出席し研究報告をした(会議の学術的な報告は[2]に記してある)。開催場のIndian Institute of Tropical Meteorology (IITM; インド熱帯気象研究所)は、国の研究所であり、インド亜大陸周辺の気象気候、海洋との相互作用、気候災害の軽減などの研究に取り組んでいる。国際的な研究も盛んであり、私が勤めている職場にもIITMの研究者と共同研究をしている人たちがいる。

車やバイクが騒々しく行き交う通りから研究所のキャンパス内へ入ると、そこは非常に静かであった。あとで見せてもらったが、奥の方には学生や職員の宿舎や訪問者用のゲストハウス、子供が遊ぶ広場もあり、のんびりとした雰囲気だった。Puneは大学や研究所が多く集まる学術都市だそうで、この研究所のはず向かいにも国立の大きな研究所があった。

IITMの正門の横には電光掲示板があり、初日のその日は、最高29度、最低19度と気温の予報が表示されていた。この時期は冬の始まりのため、また、Puneは海拔560mのため、比較的涼しいらしい。また「大気汚染を減らすため天然ガス(CNG)自動車に乗りましょう」とのスローガンも表示されていた。インドの大気汚染は、都市部では深刻な問題となっているようである。高度成長期の日本の大気汚染もこのような状況だったのだろうか？

会議では昼食や夕食にインドの料理を提供してくれて、どれも美味しかった(国際会議だったため、外国人用に多少アレンジしてくれたのかもしれない)。RABDI(甘いヨーグルト?)、MULPUA(ホットケーキ?のシロップ漬け)など私には初めてのものが多かったが、どれも美味しくいただいた。MULPUAはかなり甘く、日本人の中には途中でギブアップした人もいた。インドでは辛いものと甘いものの対比が好まれるのだろうか。また、ペットボトルの水がどれもギリギリいっぱい入っているので、蓋をあけるときは注意が必要!と何本か開ける時にこぼしてから気がついた。

街中はもとより、会場でもインドの女性研究者は伝統的な服装(サリー、パンジャビドレス?)の方が多く、色とりどりの綺麗な服装は見ていて楽しかった。日本の会議などは女性も含めて、ほとんど白黒灰色である。

## ■ Pune市内ツアー

会議が終わり、インドでの最終日、夕方の飛行機まで時間があったため、日中はPune city tourのエクサカーションに参加した。会議主催のIITMがいくつかのエクサカーションを用意してくれたその1つである。本当はエローラやアジャンタ遺跡まで行く泊りがけのツアーに参加したかったのだが、日程的に許されず、半日で終わるこのツアーに参加した。引率をしてくださったのは、プロのガイドではなく、IITMの事務職の方だった。休日出勤で申し訳ない。

まずやってきたのは、Pune Okayama Friendship Garden(プネ岡山友好公園)である。案内板によると、Puneと岡山県は姉妹都市らしく、岡山の後楽園を模して作ったそうである。ちょうど岡山大学の学生の方2名もこのツアーに参加しており、まさかこんなところで岡山が出てくるとは!としばし盛り上がった。小さな丘や池、小川、小川に架かる橋、整えられた植栽、石灯笼などが配されており、まさしく日本庭園であった。外界の喧騒も聞こえず、静かで瞑想的な雰囲気の中、人々はゆっくりと散歩をしたりベンチで休んだり、思い思いに過ごしていた。

次はしばし車に揺られ、郊外のKhadakwaslaダムのほとりへ到着した。川をせき止めて作った大きなダムで、Pune市の主要な水源だそうである。昔ダムが決壊した際にはPuneの街が大洪水になったそうだ。地図で見ると市内中心から20kmほど離れているのだが、これだけの水の量の力は恐ろしいものである。ダムは観光地と

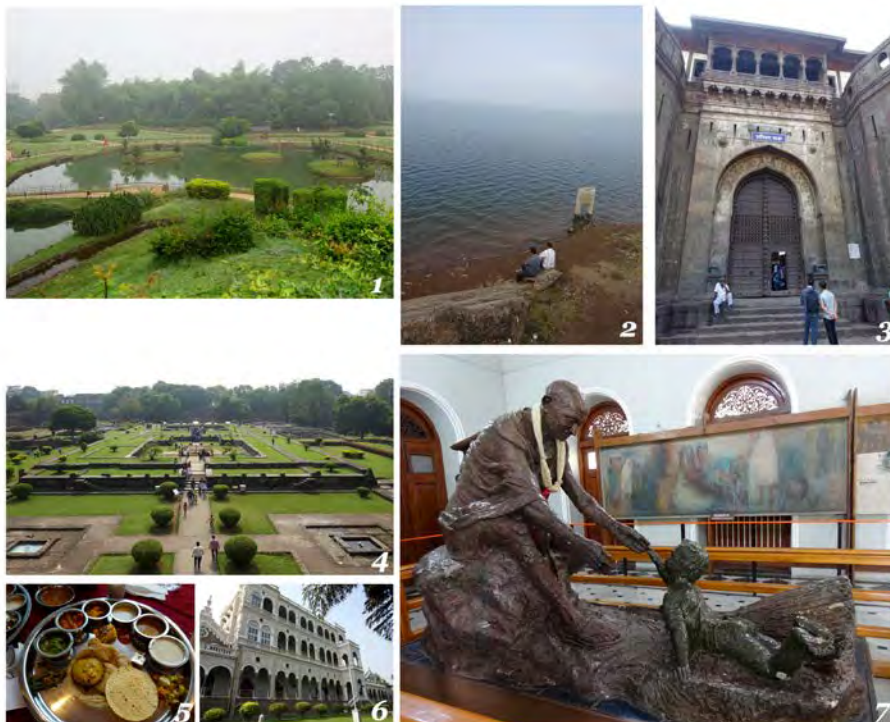


(左上) インドPuneのインド熱帯気象研究所

(右上) 正門脇の電光掲示板

(右下) 会議の行われたMeghdoot Hall

(左下) 綺麗な砂絵で歓迎してくれた



1. プネ岡山友好公園
2. Khadakwaslaダム
- 3-4. シャーニワル・ワーダ
5. 昼食のThali
- 6-7. アガ・カーン宮殿

なっているらしく、道路沿いに屋台がいくつか並んでいた。そのうちの1つでチャイをいただいた。かなり甘く、私には許容範囲だったが、日本からの参加者は水で薄めて飲んでた。

市内のShaniwar Wada(シャーニワル・ワーダ)は昔の王国の宮殿である。建物は火災で焼失してしまったらしいが、城壁と頑丈な門が残されており、城壁の上を一周できる。昔の戦争の時、人間ではこの門を壊せないため、ゾウを連れてきたそうである。さすがインド。日本の城でここまで頑丈なものはないように思うが、日本はゾウがいない分、薄い門でよかったのだろうか？

昼食には、市内の川沿いのレストランでThaliをいただいた。お盆の上に小さいお器が7つほどもあり、いろいろな種類のカレーや野菜、ヨーグルトを出してくれた。どこの地方のカレーかは私にはわからないが、いずれも美味しかった。おかわりをどんどん持ってきてくれるので、出発の時間が差し迫ってなければ、もっとゆっくり食べていたかったのだが…。

最後に、The Agakhan Palace(アガ・カーン宮殿)を訪れた。かつての王が建てた宮殿であるが、インド独立運動の際には、マハトマ・ガンディーと奥さんのKasturba、関係する人々が軟禁されていたそうだ。当時の机と椅子、食器やバスルームが展示されていた。ガンディーらは2年ほどで解放されたが、残念ながら、奥さんと何人かの方々はこの宮殿で亡くなってしまった。敷地内にはお墓が綺麗に荘厳に保たれていた。我々の車と入れ違いに、子供達をたくさんせた黄色いスクールバス5台ほどが出て行ったので、現地の人々にとっても必見の場のような。

移動中の車窓から見る街中の風景は楽しかった。車、オートリクシャ、バイク、自転車(数は少ないが)、人、犬、牛、ラクダ、豚が混在し、日本では見られない活気と混沌に満ちていた。あの道を横断しろとか運転しろと言われてたら真っ青になるが。

#### ■ 終わりに

私の初めてのインド滞在は、会議をアレンジしてくださったIITMを中心とする方々のおかげで、無事終了した。以前日本で一緒に働いた元同僚(現IITM)にも会うことができ、楽しい印象ばかりが残った。改めて感謝したい。今回は自由時間があまりなく、オートリクシャに乗る時間も残念ならなかった。私が次にインドへ行く機会はいつだろうか。その時を楽しみに待っている。

#### <参考文献>

[1] 佐伯田鶴「インドから日本へ～徒然なるままによしなしごとを～」Anjali 2015, pp.66-67.

[2] 岩田拓記・沖元洋介・佐伯田鶴・和田龍一・平田竜一、AsiaFlux Workshop 2015 「Challenges and Significance of Ecosystem Research in Asia to Better Understand Climate Change」 参加報告、生物と気象、16:D1-5、2016. <http://www.agrmet.jp/sk/2016/D-1.pdf> (Last access: 2016年7月10日)



今年のお正月三日目のことだった。

冬物セールで賑わうデパートで、好みの財布を見つけた。くたびれた自分の財布を見るたびに、そろそろ新しい財布を見つければと気になっていたところの、偶然の出会い。手に取った財布は、形といい色といい、申し分ない。ただひとつ、小銭入れが少々小さめなのが気に入らない。

それ以外は好みにぴったりなだけに、さてどうしようかと財布を片手に眺めていると、売り場の女性が寄ってきて「素敵ですよ、そのお財布」と声をかけてきた。

「ええ。でも小銭入れが少し小さいように思えて」と答えると、彼女は私の手から財布をそっと取り上げて問題の小銭入れの部分を確認すると、「いえ、これぐらいで十分な大きさだと思いますよ」と財布を私に戻した。思わず彼女の顔を見ると「小銭入れが大きいと、自然と小銭がたまってしまうんです」とほほ笑んだ。

彼女が言うには、小銭入れが小さければそのスペースに合うようにと、自然と小銭を消費するようになるのだそうだ。小銭入れが小さいと硬貨を探しづらく、ついお札を使ったあげくに小銭を倍増させるのではと考える私とは、逆の発想だった。

「小銭がたくさん入るお財布は、どうしても膨らんで型崩れしやすいんですよ。それに、小銭が居ついてしまうんですって」。

彼女のいうことに心当たりがあった。現に私の財布は小銭で肥満気味、それがくたびれ具合を加速させていた。

小銭入れが大きいタイプのものをというのは、私の次の財布のゆずれない条件である。しかしその条件以外は、二つ折りで、ファスナーできちんと口が閉まる長財布で、さらに淡い色合いのこの財布は、私の好みにぴったりなのだ。さっさとあきらめて、条件をすべて満たす財布を探しなおすか、それとも妥協して使ってみようか。財布を片手にもじもじと、なかなか決心がつかない。

「今の時期に買われると、ちょうど春財布で縁起がいいですね。それに、お財布の使い初めによい日ともうすぐだったと思いますよ」。

店員の思いがけない切り出しに、「あら、それはいつなんですか」と尋ねると、彼女は少し上を向いて思い出すように、たしかあと10日くらいあとだったと思いますと答えた。

「よく知っているのね」。感心する私に、「興味があって、つい先日調べてみたところでした。いろんな吉日の種類があるようですが、そういう日に財布を購入したり使い始めると、金運がアップするみたいですよ」と彼女は少し照れた様子だ。

年の頃は、たぶん30歳前後だろうか。制服らしい黒いワンピースを着て長いまっすぐな髪を後ろでひとつにまとめ、むきだしになった耳には繊細な細工の長いピアスが下がっている。それがまた小さな顔を強調していた。そこはいわゆるセレクトショップであり、革小物の専門店ではない。現に財布はあと一種類しか置いていなかったから、仕事上知っていた知識ではなく、本当に彼女自身の好奇心から調べたものなのだろう。

彼女の言うことが正しければ、この財布が小銭で膨らむことはなさそうだ。年の初め、私は心機一転スマートな財布を一刹も早く手にいれたいと思った。

「そうね。せっかくなら縁起のいい日から使い始めたいですね」。

私は、彼女の言うことを信じてみようと思った。そして、その財布を購入することにした。

店の出口まで見送りに出てくれた彼女は、「使い初めには、新札を用意されるといいみたいです。新札がそのお財布を覚えて、たとえ出て行ってもまたすぐ戻ってくるんですって」と、最後にもうひとつアドバイスをくれ、ありがとうございましたとぺこりと頭を下げた。

家に戻ってネットで調べると、財布の使い初めによいという日は、彼女の言うとおり大安、一粒万倍日、寅の日、などいろんな種類があった。大安はもちろん何事においても吉であり、一粒万倍日は1円が何倍にも増える、そして身体の黄色い縞が金運を表すという寅は、一瞬で千里を走ることから、出したお金がすぐに戻ってくるという意味なのだそうだ。

1月の開運カレンダーとやらをもとに、新財布の使い初めは1月12日に決めた。カレンダーのその日には、寅の字と新月のマークがついていた。風水で新月は「始まりの運氣」を持つ特別な日らしい。財布は「荷が重い」と嫌がるかもしれないが、どうせならたくさんのご利益をあずかりたい。

そして、とうとう1月12日。満を持しての春財布の登場である。

お年玉用にと両替しておいた新札を数枚、念のためお札の向きを確認したあとに、おごそかに財布に投入した。クレジットカードやキャッシュカードは、たくさん入れすぎないように。何種類もあるポイントカード類は、別のカードケースに収納することにした。すべて、ネットで調べた情報である。また、使い初めに少し多めにお金を入れておけばその金額を財布が覚え、その後も財布がそれくらいの金額を「都合」してくれる…と、これはあまりにも調子がいい言い伝えであるが、せっかくなら仕入れた情報なので、これにも従ってみることにした。

こうして1月12日に意気揚々と大海原に出て行った私の財布だが、今のところ順調なすべりだしである。私自身、小銭を意識して使うのはもちろん、レシートや不要なものをなるべく財布に貯めないなど、無駄に膨らまないように目下鋭意努力中だ。せっかくなら春財布が「不要なものばかりが『張る』財布」になってしまっただけは、意味がない。

いまま財布を見るたびに、彼女のアドバイスを思い出す。今年最初の買い物は楽しかった。それに、いい買い物があった、と思う。今年はいいいことがあるかも。ふと、小作りな彼女の顔が目には浮かんだ。 ■